

興
趣
奔
走私はどうして地理学者になったのか
Comment je suis devenu Géographe

石川雄一

地理学者の誕生

数年前、フランスの第一線で活躍している地理学者十二名へのインタビューによって、いかにして自分が地理学者となったのかをまとめた本が出版され、それはすぐに日本語にも翻訳された。フランスの地理学者に関しては、かつて高校地理の教科書にも名前があった環境可能論のラ・ブラーシュ、メガロポリスの命名者であるジャン・ゴットマンなどの著名人がいたが、英語圏の情報に押されてしまった現在、どんな人が活躍しているのか疎くなってきたので、この日本語訳を買った。

このような本で紹介されるほどの著名人ではないが、私自身も、いかにして今のような地理学者になったのかについては、十分に説明することができる。

話はフランスからスウェーデンに跳ぶが、公共施設や交通ネットワークの適正配置に貢献した時間地理学、現在のコロナ禍にも通じるモンテカルロ・シミュレーションによって伝播や空間的拡散の過

アトランタ北郊のサバーバンダウンタウン：Perimeter地区（2005年 筆者撮影）
ここは環状高速道路と都心から放射状に延びる高速道路の結節点である。大規模ショッピングモールの立地後、郊外核として大発展した。当初は公共交通がなかったが、後に地下鉄が延伸された。Perimeterとはたんに「周辺」という意味で、郊外の歴史のなさを感じる地名である。郊外核には高速道路番号やショッピングモールを由来としている地名も多い。



程を研究し、従来の地理学の枠を大きく切り開いたスウェーデンの地理学者、ヘーゲルシュトランド（1916～2004年）の研究の道りを考えると、彼の生い立ちが浮き彫りとなって表れる。やや長くなるが、『二十世紀の地理学者』*には彼の生い立ちについて、次のように記されている。

「…略…：ルンド大学名誉教授ヘーゲルシュトランドの故郷は、スウェーデン南部のベクシユの街に近い森林地帯にある。彼は、一九一六年に、鋳物・機械工場がある集落と農村集落の中間に位置する森のなかのモヘダの小学校の教師の子どもとして生を受けた。彼の父は郷土教育を初頭教育に取り入れた先駆者であり、彼が地理学を志すにあたってはその影響があったかもしれない。十三歳になって中学校へ進学するために村を去るまで、彼はこの小学校の建物の二階を住居として育っている。後に彼は、この社会的にも空間的にも境界上の位置が、農家の子供と工場の子供の喧騒の際にも終始中立的態度を貫かせ、研究者としては外側から物を眺める観察者の立場をとることに繋がった、と述懐している。

彼の故郷の当時の生活状況は、林業を主な生業とし、食料は自給、燃料は薪、機械といえはミシンと脱穀機ぐらいのもので、各家庭に自転車一台、ほとんどの過程はまだ自動車、電話を持っていなかった。動力は水車に頼っていたが、一九二〇年代になって少しずつ電気が普及し始めていた。イノベーションの何たるかを幼心にも実感しうる近代化の夜明けを、ちょうどこの地域も迎えようとしていたのである。

彼の原風景を一言でいえば、それは静寂な森林地帯のなかに広がるサウンドスケープである。すなわち、授業の開始と終了を告げる学校のベルの音や一日四回鳴りわたる、近くの工場の汽笛の音（いずれも信号音）、定刻に走り去る列車の通過音や土曜日夕方と日曜日の乳搾りの際の牛の鳴き声（基調音）は、今でもはつきりと思い出すことができるという。…」

では、私はいかにして地理学者となり、都市圏郊外の研究に関心を持ったかという点、私なりに思いあたる時空間の軸というものがある。それは空間軸としての、私が育った環境のど真ん中である郊外、時間軸としては、最も衝撃を受け時代が変わったと感じた大阪万博が開催された一九七〇年である。時間軸のほうは、もうすこし幅を広くとつてもいいかもしれない。

大阪万博が千里丘陵で開催された年、私は小学六年生であった。日本は高度経済成長の真つただ中、大阪郊外も激しい都市化の進展によって、近郊農村地帯の景観が劇的に変容した時代であった。千里丘陵はその典型事例であったであろう。万博には家族で三度訪れた。突然の未来都市の出現に激しい感動を覚えた。クルマ社会の到来を感じさせる広大な駐車場からのシャトルバスでの会場への移動、計画的に配置された超近代的なパビリオン、何よりも衝撃的だったのは、博覧会終了後に、ほとんどのパビリオンが取り壊され緑地になったことである。そのすぐのちにはオイルショックという劇的な経済の転換点を迎えることとなる。小学六年生だった私は、学校の社会科で世界地理を習っていたので、万博では企業パビリオンには目もくれず各国のパビリオンを見学し、数多くの世界地理情報を収集し、世界旅行への道案内をしてもらった。

空間軸のほうに目を向けると、当時、私の住んでいた大阪南郊は都市化のど真ん中であった。大阪郊外では最も都市化の進展が後回しになった地域であるが、六〇年代後半から、急激な都市化によって瞬間に身の回りの景観が変貌した。小学校の教室は年々増加し、当初は兼業農家の子弟が大半を占めていたのが、私のようにより中心部から流入してきた世帯の子弟が増加し、多数を占めるようになった。激しい郊外空間の変化に感動を覚えつつも、どこまで突き進むのかと不安も抱いていたのを覚えている。しかしその激しい波は七〇年代になると徐々に収まり、波紋のようにさらなる外縁部へと力を弱めながら進んでいった。その時、私はライフワークにつながる時空間軸上の真つただ中にいたのだと考える。

郊外からみた都市圏研究

では、郊外はこの百年余りの間にどのように変貌を遂げたのであろうか。学生たちに講義でこの話をするときに、よく映画「となりのトトロ」を持ち出す。アニメに出てくる裏山があつて丘陵地にはトウモロコシなどの畑作地、低地には水田が広がる田園風景は、日本の村落の一般的な景観である。誰もがのどかな農村風景を連想するであろう。私は架空の物語であつても、

それがどのような場所をイメージしているのか大変気がかりになる。物語の設定で、トトロの場所は、高度経済成長期前の東京郊外であることがすぐに分かった。今その地域はどのように変貌しているであろうか。おそらくこの時代設定の10年もたないうちに大規模な変貌が生じていったであろう。

ワシントン・ポストの記者ジョエル・ガロー(Joel Garreau)が一九九一年に発表した著書『エッジ・シテイ』***の表紙の見開きには、ワシントンDC郊外のタインズ・コーナールの新旧の写真が掲載されて

いる。一方には、農道の十字路の周りに荒地・牧草地が広がっている景観、片方には、大規模ショッピングモール、オフィスが林立する景観。この数十年の間に、大きな変貌を遂げた郊外空間はほかにも数多くあげることができる。私も二〇〇〇年代初頭に、地下鉄とタクシーを乗り継いでタインズ・コーナールを訪問した。ショッピングモールの周囲には広大な駐車場に囲まれた数多くのオフィスが林立しており、広角レンズのカメラを持たなかったために、うまく写真に収めることができなかつたことを覚えている。

「となりのトトロ」を制作したジブリの工房は東京郊外にあるため

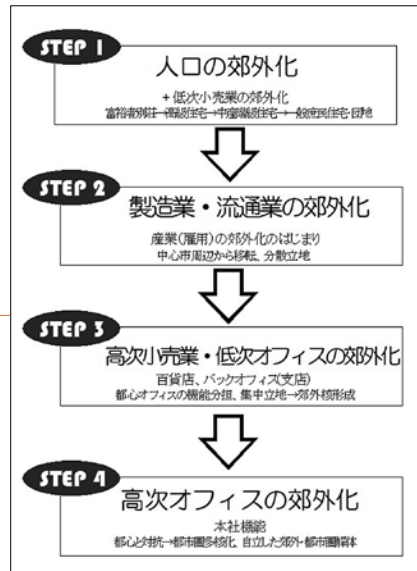


図 郊外化から多核化に至るステップ

か、ジブリの作品にはほかにも郊外を扱った作品がある。九四年公開の「平成狸合戦ぽんぽこ」では開発中の東京多摩ニュータウン、九五年公開の「耳をすませば」では、完成した郊外の中心核である京王聖蹟桜ヶ丘駅一帯の風景など。これらも私の講義ネタである。

では、郊外はどのように誕生したのであろうか。私の専門である郊外を論じる前に、都市化について論じる。現在の郊外につながる都市化の進展は、産業革命期から始まる。いうまでもなく産業革命

は「農業社会」から「工業社会」への変革期であり、空間に置き換えると「農村」から「都市」への激しい人口移動が生じた時代である。伝統的な農村工業の没落によって、多くの農民が、近代工業が萌芽した都市へ移住し、工場労働者となった。しかし都市人口の増加が、過密による公害を生み出し、都市環境が悪化した。大気汚染や水質汚濁、今でいうところの感染症の蔓延などの不安が増大する。そうした中で、脱出が可能な富裕階層から郊外居住を開始する。それでも都心でのビジネスを優先するか郊外居住による健康を優先するかは、判断に迷うところであつたであろう。

郊外化のステップ

九〇年代から研究を続けていた郊外研究については、二〇〇八年の『郊外からみた都市圏空間』***である程度の完成を得た、図は、著書中で郊外の成長過程を模式的にまとめたものである。ここでは郊外化の段階を、次のステップとなる多核化までをふくめて大きく四段階に区分している。「都市化」とは区別されて「郊外化」という言葉が、日常的に使われだすようになったのは、前世紀末の地方都市での小売業の郊外化が進展し始めた時期であると記憶する。

図中のSTEP 1の始まりは意外と早く、都市化が進展した近代

初頭にすでに人口の郊外化が始まっていた。前述したように、過密から環境が悪化した都市内部から緑に囲まれた周辺地帯に居を構えたいという思いは、多くの住民にあり、それがかなえられる富裕層からフライト（郊外への脱出）することとなる。都市交通が未熟な初期は富裕層の別荘としての利用も多く、神奈川県鎌倉周辺などはその典型例である。その後すぐに郊外鉄道で東京都心部と結びつくようになる。京阪神圏では、芦屋が有名であるが、堺市と高石市の境界周辺が実はそれよりも古い高級住宅地である。この時代は鎌倉の事例も含めて臨海部が、潮風にあたることで健康に良いとされ、都市内部で呼吸器系の病気が蔓延していくなか、健康重視で臨海部に高級住宅地が建設されていく。しかしやがてこれらの地域は臨海工業地帯と競合するようになり、郊外住宅地は緑に囲まれた高台を目指すようになる。

産業革命が軌道に乗ると、新中間層が誕生する。現在ほどその規模は大きくないが、わずかながらに増えつつあった新中間層も郊外を目指すようになる。これに最初に目を付けたのは現在の阪急であるが、当時の沿線である宝塚線、箕面線の沿線に、中産階級でも取得可能な住宅地を建設していく。

あらゆる階層に郊外居住がいきわたるようになるのは、戦後の高度経済成長期になってのことである。この時代は産業革命期を超える大規模な大都市圏への移動が生じた。都市の経済発展にともなう労働者の増加、それによる住宅不足が深刻となった。手取り早く大規模な開発ができるのは郊外である。そこに数多くの団地が建設されるようになった。またそれと同時にSTEP2の製造業・流通業の郊外化も進展していくこととなる。沿線によつては立地に違いがみられるが、私が大学生であった七〇年代後半ではすでに、通勤時間帯の都心方面行の電車は、乗客が日々増加するものの、途中駅で降車する通勤者も多くなつていったのを覚えている。

STEP3は、百貨店、総合スーパーなどの高次小売業、金融機関やサービス関連のオフィスの郊外化が進展していく時期である。

総合スーパーの立地展開が進んだ七〇年代から生じるようになった。また大都市ではモーターゼーションが進展する八〇年代から九〇年代にかけて郊外型ショッピングセンターの立地展開が進み、小売業の郊外化が話題となった。当時の私の住まいがあった八尾市でも八一年に西武百貨店が開店した。この時期、大都市圏郊外の優等列車が停車する駅や乗り換え駅、大規模ニュータウンの中心部に郊外型百貨店が数多く展開した。

ただしこの時期に郊外に立地した百貨店、オフィスなどは都心オフィスとの役割分担が明確であり、都心の機能よりは低次なものが多かった。オフィスは窓口業務が中心、また百貨店は郊外型とも呼ばれ、現在のデパ地下とは明らかに異なる安価な日用食料品、低級衣料などが多く販売されていた。この頃になると、クリスマスイブの日に、通勤帰り都心の百貨店で買ったクリスマスケーキを電車に持ち込むお父さんが、激減することとなる。郊外の降車駅前でも購入できるようになったのである。

STEP4は図では高次オフィスの郊外化としていますが、本社機能の立地や商業規模で都心の商業地区を凌駕するような状況への変化である。ここまでくると「郊外化」というよりも都市圏が「多核化」したといった方がよいであろう。日本の大都市圏では、いまだに都心が強力であるため、ここまで到達したといえないが、北米の都市圏では、都心を含む中心市の衰退で、すでにこうした状況は進展している。通勤や消費行動などをみると都心抜きで郊外居住者の生活が循環しているのである。前述したエッチ・シティともよばれる郊外核(Suburban Downtown)が郊外居住者の通勤や消費行動の核となっている。ここには本社オフィスや大規模ショッピングモール(Super Regional Shopping Center)が立地しているが、公共交通が十分に発達していないため、中心市に多く居住する低所得層には近づきたい地区となっている。北米では中心市が荒廃したため、郊外居住者は中心市と疎遠な生活を営むようになっていく。デトロイト市のような都市再生の取り組みもみられるが、過去の栄光を取

り戻せるような状況には全く至っていない。

地方都市研究と社会貢献 … 郊外と中心のバランスのとれた都市成長

再び、日本に目を向けると大都市圏では都心の都市機能が強いものの、東京大都市圏のような一極集中下で成長し続ける大都市圏では、都心を補完する業務核が成長した。さいたまや千葉、横浜などがそうしたケースである。こうした補完的な郊外核が大都市圏の勢力をさらに空間的に拡大することとなっている。日本では都心の衰退という点では、地方都市が深刻化している。もともと都心のオフィス機能などが脆弱で、雇用が分散的であった地方都市では、小売業の郊外化の進展によって、中心市街地の多くの機能が弱体化している。いわゆるまちの顔が消えて顔の見えない都市が増加している。

拙著『郊外からみた都市圏空間』は、金沢を經由し長崎県佐世保市に在在中、大都市圏を離れて十数年でようやくまとめることができた。なお佐世保市に在在中は、公立大学に所属していたこともあり、地域貢献に駆り出されることが多くなった。離島の研究や、学生とのまちづくり事業、行政の各種委員会の委員や会長などを数多く引き受けることとなった。離島調査は、都市地理学者にとって未知の分野であったが、自分の研究スタンスを見失いたくなかったので、離島研究では、本土都市と離島とのつながり、都市部からのインターン移住についての研究を進めた。また地方都市でも郊外化が大きな話題となっていたので、大都市圏とはスケールが異なることに苦労しつつも、地方都市の郊外研究も徐々に進めていった。

なお地方都市では郊外の課題よりも中心市街地の衰退の方が深刻な状況であった。一般的には地方衰退の大きな要因は人口減少であるといわれているが、都市構造の視点からみると、モータリゼーションの進展であると考えられる。地方では大都市圏以上にモータリゼーションが進展した。道さえあればどこからでも移動できる地方では低密度な郊外開発が主流となった。その結果、公共交通のサービス

はますます低下することとなった。こうした現象は日本だけでなく、他の先進諸国でも同じであったが、日本の場合、対策が遅すぎること取返しつかないところまで悪化したといえる。その地方でも、人口減少社会のもと高齢化の進展に伴ってマイカー依存していた郊外地域の課題も深刻化した。当時は佐世保市特有の斜面住宅地の空き家問題や公共交通に関する課題、小売業の郊外化と中心商業地区の課題などを考えつつ、中心と郊外のバランスのある成長はかなるものか答えをみつけようとしていた。

都市圏衰退期における今後の課題 … 賢明なる衰退 Smart Decline

現在、私は地方都市での研究成果をまとめつつ、あらたな大都市圏における課題にも着手しようとしている。それは大都市圏の衰退である。国内人口の停滞、並びに減少は、当初は過疎地域でみられる現象であったが、当然のことながら最終的には大都市圏まで押し寄せる。京阪神大都市圏はといえば、すでに停滞から減少へのステージに入りつつある。しかしそうしたなか、ミクロスケールで地域を観察すると、駅前のように土地利用の高度化が進展している地域があり、またその一方で空き家・空地の増加が進んでいる地域もみられる。今後は、大都市圏の人口減少と人口増加のメカニズムを交通と土地利用の変化から解明し、縮退せざるをえない都市圏の今後の在り方について探求していきたいと考える。

* シルヴァン・アルマン編、荒又美陽・立見淳哉訳『私はどうして地理学者になつたのか』フランス地理学者からのメッセージ』学文社、2017年発行

* 竹内啓一・杉浦芳夫編『20世紀の地理学者』古今書院、2001年発行

* ** GARREAU, Joel "Edge City-Life on the New Frontier" Anchor Books、1991年発行

* ** 石川雄一著『郊外からみた都市圏空間』郊外化・多核化のゆくえ』海青社、2008年発行

(本学経済学部教授)